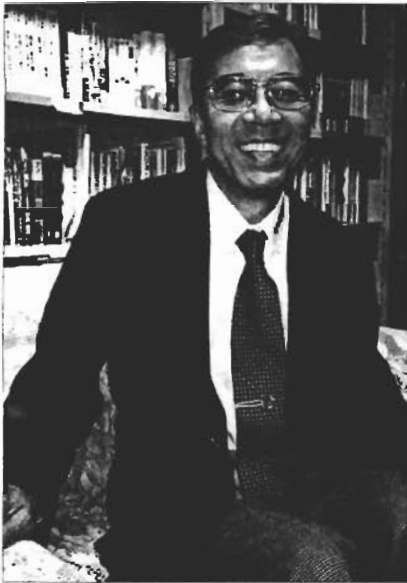


◀ S · E · L · D · A · A ▶ No.36

平成15年4月20日発行

上智大学英語学科同窓会
東京都千代田区紀尾井町7-1
上智大学英語学科事務室気付

Sophia English Language Department Alumni Association



サバティカル明け 職場復帰しました

英語学科教授 丹野真 (昭和45年卒)

一年間研究休暇をいただきました。ありがたいことです。しかし大学教員のこの特権も、最近の風潮を考えると、早晚廃止されるかもしれません。いやそんなことになったら大変です。今でも低い日本の高等教育の程度が、さらに悪化するでしょう。貴重な一年を無為に過ごすわけにはいきません。本腰を入れて研究と講義の下準備に励みました。4年近く山積み状態だった書物を読み、雑乱読の楽しみも満喫できました。充電完了。レギュラー満タン。気分爽快。いざ出勤です。

でも依然としてどこか調子が変わります。相変わらず疚しさと居心地悪さを覚えるのは何故でしょう。日本人が、日本文学でなく米文学を、英語でなく日本語で、語学中心の英語学科で講じています。おかしいですね。時折教室で、右利き用標準ギターを左手で弾きながら、鼻にかかった英語でカントリーを歌います。そのあと日本語でアメリカ文化の特徴を講義します。奇妙きつな情景ですね。

数年前、上智大学アメリカ・カナダ研究所の共同研究で、作家の江藤淳氏を招き講演会を行ないました。氏は帰り際嘆息交じりにこんなことを言ったのです。「私にとって近代化って一体何だったんでしょうね。」あれから暫くして氏は自害しました。ひょっとすると、近代と果し合いをしたのではないのでしょうか。

4歳の時、英会話のお稽古をさせられました。近代という迷宮に初めて足を踏み入れたのです。キリスト教と言う焼き印もすでに押されていました。以後、欧米という美酒麻薬に耽溺中毒し、一方で度重なる二日酔いの苦しみを呪い、薬の副作用による拒絶反応と闘いつつも、50年以上かけて宮殿の奥深く入ってしまいました。

決闘など滅相もない。せめて宮廷内で一流の物真似猿として頑張ります。近代とは一蓮托生。極楽往生否、煉獄で仮住いの際には、夢のキャデラックに乗り、忘却の川岸で迎える聖パウロに会いたいものです。

☆オール・ソフィアンズ・デーで会いましょう —— 2003年度 SELDAA 総会&懇親会のお知らせ ——

2003年度総会を今年もオール・ソフィアンズ・デーに合わせて、5月25日(日)に開催します。

総会では、活動報告、講案の承認の他、SELDAAの今後の活動について、多くの方のご意見を伺いたと思います。

総会終了後には、ささやかながら親睦パーティーを予定しております。会費は無料。是非皆様お誘い合わせの上お越しください。久しぶりの母校で、楽しいひとときを過ごしましょう。

2003年度 SELDAA 総会および懇親会

日時：2003年5月25日(日) 12:00～14:00

場所：上智大学1号館202教室

<SELDAA ホームページ>

<http://www2u.biglobe.ne.jp/~seldaa/>

『運命の絆』

堀 亮 (昭和34年卒)



初めて欧州に出張したのは1964年東京オリンピックの年でした。当時さくら丸という見本市を船に積んで各地を巡回する輸出振興策があったのです。西欧11ヶ国を回ったのですから当時としては人も羨む旅だった訳ですが、受注はおろか、その切っ掛けも掴めなかったのが、この振興策そのものを批判する出張報告を書いたものでした。今思えば私を推薦してくれた役員に平気で恥をかかせていたのです。

1979年から83年までパリにあって全欧をカバーするMitsui Seiki Europe S.A.の社長として赴任しました。欧米の超一流機械と互角に戦い着々と販路を広げておりました。三井精機が成功しているとなると、他の日本メーカーが怒涛のように殺到してきました。これで欧州の商習慣を破壊してしまったように感じました。

1995年、三井物産がファナックの射出成形機の欧州総代理となり、それを任されてデュッセルドルフの郊外にある Mitsui Machine Tool Europe GmbHに赴任しました。各国に代理店を設ける傍ら直接売り歩き、1年目2台、2年目20台、3年目100台と、錚々たるメーカーが健在な欧州では射出成形機は売れないとの世評を尻目に着々と実績を上げることが出来、今日では年間500台を越すようになりました(売値で1,000万円ぐらいの機械です)。勿論一旦撤退していた日本勢が逆襲してきました。しかし今度はファナックのサービス拠点が各地にあり、その地の言葉でbefore, afterサービスができるようにしていたので、入り込む余地がなくなってしまったのです。

ECのお陰でこの国でも英語が通じるようになるでしょうが、本質的には自国語を尊ぶのは当然です。各国の代理店の人やお客様と親身のお付き合いができたのも、フィンランド語やトルコ語を含む各国の言葉を最低限覚えて常に使ったことも良かったのではないかと思います。これから欧州でビジネスマンとして働くには最低英独仏はものにしてプロになることが必要と思います。

1963年から輸出に携わり世界各国との仕事をしてきましたが、米国のことは当時の上司が米国好きで、アメリカなら俺が行くと行ってしまいますので、欧州行きは私に回ってきました。その後何か見えない力がいつも私を欧州に引っ張っていたように感じます。長男は銀行のパリ支店にいて、昨年末に初孫をもうけました。現在私はファナック株式会社の顧問をしております。

『身すぎ世すぎの英語でも・・・』

木村 敏和 (昭和34年卒)



我が家の背戸の太平洋岸ではるか西に上智大学を望み、訪ねてくれた現役時代の秘書とともに。

同窓生の井上ひさしさんが「モッキンボット師の後始末」生活を送っていた頃、私たちは外国語学部英語科("学科"ではなかった)で、刈田先生や野口先生、青木先生や千葉先生に英語をしごかれていた。楽しみは・春の桜に・秋の月・ではなく、外人教授のメイスン先生、バリー先生、グラチアノ先生、レーニー先生などナマの英語の時間が楽しみであった。文学部と違って外国語学部は、英語を道具として使おうというヤカラが大半であったと思うが、かく申す私も英語は身すぎ世すぎの手段として認識していたのであって、間違っても英文学者になろうなどとは思ってもしなかった。

上智ではナマの英語を教えてもらえたから、当時としてはめずらしく、われわれには外人アレルギーがまったくなかった。だからアメリカでも英国でも欧州でも、英語が通じさえすればなんとかなる、という変な自信みたいなものが身についていて、ま、それが国際人というものではないだろうか。私の定義によれば、地球上どこへ行ってもなんとか生活ができる、というのが国際人なのだと思う。

昭和34年(1959年)にめでたく卒業証書をいただいて社会人になった。機械・電子部品のメーカーでその後約40年を過ごして7年前にお役御免となった。以降いまに至るまで外国生活は累計約21年にわたる。日本にいるときも英語とは縁が切れなかったから、文字通り「身すぎ世すぎ」に役立つ英語を教えてくれた上智大学には感謝のほかはない。おかげさまで家族を飢えさせることもなく、企業人をつとめあげることができた。現役最後の勤務地がシカゴであったから、そのままアメリカに居座ることにした。日本の社会が「和」つまり「他人に気配り」の世界だとすれば、アメリカは全国民がおのおの最大限に自分のハピネスを追求する国であるから、(物価の安さと相俟って)老後を過ごすのにこれほど快適な国もない。常夏の南カリフォルニアともなれば腰痛もちの私にはなおさらのことである。それで引退後の家内との生活は、たまの訪日に際して；

●楽しみはホフマン館の先生達、バリー・グラチに笑う友どち。

というわけだ。もちろんいまでもマックのハンバーガーを買うのに英語で苦勞することはない。

「丘の景観を守る」

ポテトヴィレッジ美瑛ポテトの丘

松田 武夫 (昭和43年卒)



美瑛には私をひきつけるものがあった。100年余かけて農家の人々が作り上げてきた丘の風景。その丘から、真近に眺む大雪山系の美しい山並み。9年前に脱サラしてここ美瑛で宿屋をやるまで勤めていた航空会社の仕事から世界と日本を見てまわってきたが、丘と山がこんなに美しく組み合わせられているのは「美瑛」だけである。ところがこの風景は今、危機に瀕している。

その原因の一つに、国の縦割り行政の失敗がある。農作物輸入の関税撤廃の方向に進んだ結果、輸入農作物が大幅に安くなり、道産の農作物の値段も下がることになった。この「農作物価格の低下」と、世界的な「天候異変」が、農業を取りまく環境を厳しいものにしていく。こういう状況の中で高齢化が進み、美瑛の農家が後継者不足となるのは当然であろう。美瑛の丘の風景は農業の営みによって作られているので、農業人口の減少と共に姿を消していくことになる。これを防ぐために「美瑛農業会社(法人)」の設立を提唱する。出資者は、農家(51%以上)、美瑛JA、農業に関わる機械、肥料や食品バイオの会社、全国の美瑛ファンである。高齢になり後継者の居ない農家の方は、農業会社に土地を預け、自ら農業指導員として関わる。そしてやる気のある若い労働者を都会から受け入れるのだ。土に親しむ自然豊かな生活をしたいと考える若者は意外と多い。新しい農業従事者が誕生すれば、結果的にこの景観を維持する事ができるのではないかと考える。

第二の問題点は、土地を求める人の急増と乱開発である。住宅建設等、開発に対する制限が必要なのだが、農家を取りまく環境が厳しいので農家の人達が畑、林や雑地等を売ることを、当然ながら認めない。本来ならがんばらなければならない行政にその力がない。ということは、美瑛の景観をいつまでも存続させたいと思っている人達がこの景観を守るより他はないのである。そこで「美瑛景観基金」を設立し、全国にひろがる美瑛ファンや我々のような観光関係の人間が、資金を出して、土地を買い支え、又、最初に述べた「美瑛農業会社(法人)」などをつくり、血のつながらない農業後継者を育成し、採算の合う農業を追求する。町の新聞や会議、そしてフォーラム等でこれを提唱し、基金を管理する地元の組織づくりにはげんでいるところだ。

今、私の頭の中はいかにしてこの景観を守っていくかでいっぱいである。少しでも多くの方にご理解を頂き、協力していただける事を願いつつペンをおくこととする。

『衝撃的印度旅行記』

松良 千廣 (昭和48年卒)

仙台の私立女子高校常盤木学園に転職して18年、今は理事長兼高校長ですが、その間多くの留学生をホストしていた結果、以下のような旅をするチャンスに恵まれましたので、御報告申し上げます。

インド上流階級の美人娘プラナリのホストファミリーをしたお陰で、思いがけずムンバイでの結婚式に招待された。人口1,600万人のムンバイの4分の1はスラムと聞いていたがそれが散在している為「街はスラムだらけ」という印象が残ってしまう。残りの4分の3は普通の貧民でプラナリ達のような上流階級は1%程度と推測される。あの暑い国でタクシーには冷房が無い為、窓は開けっ放し。したがって信号で止まる度に窓から物乞いの手が入ってくる。10円や20円でも彼らには有難いお金だが「1人に施すとそれを見た数10人が群がって来るから最初から施すな」と言われていたので冷酷な態度で通して来た。旅行者の同情を得る為に子供の手首を切り落とす親も居るとのことである。そんな子供達はパンツもはいていない。道路で体に石鹸をつけて雨が降って来るのを待つ大人(7月のムンバイではすぐシャワーが来る)、そしてその雨水をカンに貯めて歯を磨く子供達が居る。バイクをバイクで磨いて何になるかと言いたくなる環境である。

街全体のファッションは地味だが、並の貧民でも女性に限っては鮮やかな色のサリを纏っているのが印象的である。道にはイギリスから連れて来た血筋の良さそうな野良犬やカラスが居て、皆ガリガリに痩せているのが衝撃的。残飯獲得バトルではスラムの人間が優先権を行使していると思われる。日本に来れば野良犬でさえ糖尿病になる程の食物があふれているのに。その他にも野良豚や野良牛が歩いている。たまたまインドなので生存しているだけで、中国に移住でもしようものならあつという間に食べられてしまうはずである。牛は特に優遇されているだけに我が物顔で高速道路も歩く。これを車で追い越すときがこわい。彼等はウインカーも出さずに車線変更をすることがある。本当にヒヤッとした。

知識階級は貧困の問題を意識しているので「あなた自身が政治家になったらどうか」と問うと「自分の財布より貧乏人の財布を大切にすの奴が当選したことはあるけれども国会内で村八分にされて何も出来なかった。」という答えで彼等もサジを投げているようである。したがってこの国の99%の人々には未来への希望が無い。日々変わりつつある中国とは全く異なり30年後も同じでしかないだろう。よって私はこの国を発展途上国と呼べない。

ところで我々より1日遅れでデリーに入って来たのがパキスタンのムシャラフ大統領であった為町中大変な警備となっていた。両国の話題の主演は当然カシミー

ルの帰属問題であるがもちろん今回も決裂した。私はここで又インドの知識人と問答してしまった。「印パ両国がカシミール問題で合意する可能性が無いのは誰でも知っていることではないか」「その通り」「なぜ今更話し合うふりなどするのか。解決方法は武力しか無いではないか」と突っ込んだところ、彼はニコリとして「確かにそうだが、今や相方が核保有国になってしまった。我々の核使用は同時に敵による核使用を意味する自殺行為となった。我々は二度と全面戦争は出来なくなったのだ」と明確に核保有国の理論を話してくれた。核戦争から身を守る唯一の方法が核を保有し、使用はしないことという考えである。パキスタンの核実験を止めさせようと「唯一の被爆国の立場から」説得をしに出かけて行った外務省官僚と河野外務大臣の空しい豪遊は約1年前。外務省は金銭感覚だけではなく国際感覚も含めて全身麻痺としか言いようがないかも知れない。

ところでデリー迄足を伸ばしたのは言うまでもなく隣町アグラでタジマハールを見る為である。17世紀（江戸時代初期）にムガル朝の後の墓として22年もかけて建てられた高さ74mの巨大な大理石モザイクの芸術品である。その美しさに見とれる間もなく、その王は、同様の芸術品が二度と作られないようにその仕事が終わった2万3千人の大理石職人の手首を切断したとのことである。中国の地下宮殿と言われる墓を建設した職人達はその構造の秘密を守る為に全員殺されたという話とどちらが残酷かは決めようもないが、歴史と遺跡の裏は全て血だけである。

何件かの店にも入ったがインド商人は全く鼻持ちならない。現地人のプラナリが激怒するようなポリ方をする。外国人と見るや定価の倍から10倍位ふっかけて来るのは珍しくない。3倍や5倍位では円に直してみると日本よりは安いので言いなりの日本人が多いのであろうが、買う前に現地の知人に相場を聞いて交渉に入るといい。敵が「1,000ルピー」と言っても「300なら買う」と答えると一発で300にはならないが問答毎に100ずつ下がり最後は差し値迄下がる。タクシーでも大昔のメーターと精算表を使っている為、ウソを言う運チャンも居る。あまりの値段の時には大声を出す人と人が集まって来るのでウソつきを止めてくれる。しかし、更なる驚きは公共料金の外国人料金である。タジマハールの入場料などでも「インド人100円 外国人2,000円」等々航空運賃も国籍によって明朗に異なるのである。それも最高では50倍違うもの迄あった。ガソリンスタンドで飲むコーヒーは一杯15円という国であるが、さて皆さんの感覚ではいかがでしょうか。

最後に帰国後インドの失業率を調べてみた。現地で聞いても誰も教えてくれなかった。日本は4.9%で不景気と騒いでいる。南アフリカでは40%でも騒がない。インドは現地でも教えてくれない訳である。どこの資料にも載っていなかった。分母たる人口や求職者数の掴みようが無いのも無理はない。地球上のパラエティエは旅をするほど大きくなることを改めて実感してしまった。

銀祝、銅祝を迎えて

今年、昭和53年（一九七八年）卒業の方が卒業後25年の「銀祝」、昭和63年（一九八八年）の方が卒業後15年の「銅祝」を、それぞれ迎えられます。銀祝、銅祝を迎える方に、現在の心境を語っていただきました。

還暦までの 12年計画

鐸木 能光 (1942年)

昔から、自分の人生を12年ごとに区切って考える癖があった。
12歳……中学入学。

中高一貫の私立男子校で鬱屈した青春時代が始まる。
24歳……念願のレコードデビューの話が決まったが、翌年、アルバムレコーディング中に相棒と決裂して振り出しに戻る。同じ時期に結婚。

36歳……音楽業界での仕事が成功しないまま、「小説すばる新人賞」という文学賞を受賞。しかし、その後はケチのつきっぱなし。

そしてとうとう今年48歳だ。次の年男が回ってくると還暦！体力・気力を考えると、これから先の12年は、今までの集大成というか、やってきたことをいかに残していくかを考えて生きなければと思っている。

社会はますます閉塞し、文化は荒れている。バブルの頃に比べて、一個人が巡り会えるチャンスは激減したが、その代わりに、インターネットという新しい手段ができた。個人サイト(<http://takuki.com>)の他、文藝ネット(<http://bungei.net>)、著作権ORG(<http://chosakuken.org>)、縄文村(<http://jomon.org>)などなど、今、数多くのサイトを作りながら、「還暦までの12年計画」を進めているところだ。

卒業15年を 期して

片柳 大介 (昭和63年卒)

人は誰でも時代の刻印を打たれる。その時代に嫌悪感しか持っていない人でさえ、その時代の「陰画」(ネガ)を正しく生きたという意味で刻印を打たれる。

さて私はどのような時代の刻印を打たれたのだろうか。私が学生生活を終えた15年前、それはバブルの時代であった。繁栄と虚栄、日々の生活にもはや心配は要らず、進歩は一直線に邁進されるべきものと信じられた。「自分探し」なる言葉が語られる余裕さえあり、すべての闇は封じ込まれ見ない振りをされ、日常が奇妙な安定の中にあつたように思われた。

当時の私はそして、この「自分探し」という項目に殊更に惹かれていたようだった。今ならこんな言葉なぞ笑い飛ばす私だが、よほど闇が怖かったのであろう。友人に言わせれば、私は盛んに「自分」なるものを追い求めていたようだ。若さと無能ゆえの愚行であった。

この闇の正体は「将来」である。探し求めていた「自分」はもちろん「将来の自分の姿」である。当時の私が焦り求めて、ついに得られなかったのも当然だ。大切なのは、未来の自分を思い描くことではなく、たった今感じた、自分の思いを、どうやって意味ある言葉として仔細に表現するかなのだということを知ったのは、そのずっとあとのことであった。

15年。時代も心境もドラスチックに転回した今、私が手にしたこの武器を以って、過去の愚考を意味として噛みしめるのは、愚かな事であろうか？

小林(江原) 契子

(昭和63年卒)

英語学科卒の皆様、お元気でお過ごしでしょうか？早いもので、主人の仕事でシンガポールに住むようになって、4年が経とうとしています。

私にとってこの15年は、あっという間のようで、実は色々なことがありました。

卒業後、サントリー(株)に就職し、その後英語学科の2年先輩と結婚、アメリカで生まれた長女を初め、一男二女に恵まれました。特に次女は、先天性心臓病がありながらも、日々元気に可愛く育ち、3人の子供に囲まれたこの頃が、私自身最も輝いていたと思います。その次女も、3歳のある日、突然静かに神様の下へ帰って行きました。これ以上ない悲しみの中でも、予定通りシンガポールに移り、今もそれなりに元気に過ごせるのは、主人と子供たちのお陰であり、又上智大学で得た教養に支えられてきたと、実感しています。

上の子供たちも大きくなり、4月に長女は中学生、長男は小4になります。特に長女は自分の将来に興味を持ち始め、そんな時主人も私も、自分の大学のことを誇りをもって話せることを、嬉しく思っています。

大学の頃、ソフィア会事務局でアルバイトをさせていただいた私は、この時期になると毎年「オールソフィアンの集い」のことを思います。今年も出席できない私のためにも、きっと友達が参加し、後日お話がきけることと期待しています。

上智大卒の皆様のご活躍を、お祈りしています。

SELDAA創立20周年と 同窓会の活性化を考える 委員会の設立について

SELDAA 会長 石川雅弥 (昭和40年卒)

前号で、SELDAAセミナーの時間変更を検討している旨のご報告をしましたが、検討の末、変更せずに従来の開催時間を踏襲することになりました。その背景としては、女性セミナーの設立趣旨を重んじ、名称は変わってもSELDAAセミナーはセミナーとして独自に活性化すべきであるという結論に至りました。この上は、是非皆様のご支援とご協力をお願いしたいと思います。

セミナーの時間変更とは別に、同窓会としては、「卒業生の輪を広げながら自然発生的に新たなグループが結成されたり、同窓会の活動について新しいアイデアが提案されるような場を設ける」ことは重要なことだと考えております。既にそのような活動をされているグループがありますので、ご紹介します。

昭和43年(1968年)卒のクラス会ではホームページを立ち上げています<<http://www2.wind.ne.jp/johodesign/eigoka3943/>>。2000年のオールソフィアンの集いでクラス会をきっかけに、近況報告などの連絡サイトとして創設されたそうです。企画は篠崎(根子)多由美さん、編集・制作は笠松亮さんが担当されています。現在はメーリングリストも持ち、2週間ごとの更新をペースに、十分に所期の目的を達成されているとのこと。検索サイトからこのホームページを見つけ、33年ぶりにメールで連絡がついたという方や、教え子が先生(つまりクラスメート)の名前を見つけたり、うまいもの談義のメールが掲載されたりなど、カジュアルなものから、なかなか多彩な内容です。是非、サイトを覗いてみてください。大変参考になります。

SELDAAが創立されたのは1984年です。初代の会長は、昭和38年卒の鈴木達也氏でした。つまり、我々の同窓会は、来年、20周年を迎えるわけです。同窓会では、この記念すべき年に向けて準備委員会を設立することになりました。この委員会には、同窓会の活性化の一環として20周年記念の企画の立案をお願いしますが、同窓会の懸案事項であるSELDAA活動全般の活性化についての意見交換の場としても利用していただきたいと思います。6月から2ヶ月に一回を目処に委員会を開催し、同窓会の活性化についての提言や、新たな活動やグループの結成につながるような案が提示されることを期待しております。

つきましては、同窓会では準備委員会の委員を募集することになりました。幅広い卒業年度の方々に参加していただきたいと思います。応募は、同封の葉書にて同窓会事務局まで、または、e-mailにてseldaa@mve.biglobe.ne.jpまでお願いします。応募者が少ない場合には、同窓会からお願いすることもあります。委員会の構成については、コアとなる委員とオブザーバー的に参加できるようなメンバーとし、なるべく、自由に参加できるような運営と雰囲気を考えております。

卒業生短信

3月上旬までに事務局に届いたお便りを掲載いたします。(本文中では敬称を略しております。ご了承ください。)
また、皆様からのお便りを募集しております。ご自身の近況、自著の宣伝等、なんでも結構です。同封の葉書に書いて、同窓会事務局までお送りください。

■英語科を卒業後、翻訳に従事しつつ書き溜めた原稿を『類語玉手箱』と題する40万語搭載のCDにしました。

これまでのところ、本格派の新聞記者さんや翻訳のプロから、「圧倒的な分量があり、しっかり利用させてもらう」「内容のキメ細かさに感心した」などの評価が寄せられ、ほっとしています。

思えば駆け出しの翻訳者のころ、英文の中で当然のような顔をして頻出する単語、good、help、trouble、sayなどの適訳を求め(「よい」「助ける」「問題」「言います」では出来の悪いギャグですからね)、あちこちの類語辞典を漁ったものですが、結局ムダと知りました。そして、それなら翻訳に役立つ辞書を自分で作るしかないと思立ちました。それがこの『類語辞典』の原点です。

それから幾星霜(?)、ベネッセ・コーポレーションからコンパクトな辞書の形で拙稿が陽の目を見ることとなりました(1999年出版)。ところがここに収載されたのは、コストの関係から全体の5分の1ほど。

全体を作った者として、これはツライ、クヤシイ、ナサケナイ。その結果生まれたのが今回のCD版『類語玉手箱』です。パッケージなどの見栄えはあまりヨロシクありませんが、辞書ソフトとしてユーザーの期待をそれほど裏切ることはないと思っています。

翻訳者に限りませんが、英語科卒業の方で2、3人、この辞典のモニターをしていただける方はいらっしゃいませんか? ご希望の旨をメールしていただければ幸甚です。

モニターはしないけど、購入したいという方も大歓迎です。

e-mail: hagihori-nf@mx52.tiki.ne.jp

藤本直 (昭和43年卒)

■いつもSELDAのニュースレターをお送りいただきありがとうございます。また熱心にこれの下支えをして下さる人々に敬意を表します。

実は私共昭和35年卒の英語学科の同窓会を40数年に初めて開催しました。17~18名参加し、昔話に花が咲きました。これからSophians Clubに我々も毎月集

まろうと話していました。34年卒の小林康司さんの記事(注:前号No.35の6ページ)にもあるように、毎月か2ヶ月に一度、会う日を定めると、我々も集まりやすいのです。私の考えとしては、月初め1日か2日がよいと思います。月末は現役の人は集まりにくいし、月中は何かと退職している人も予定があるため、1日(ついたち)などがよいと思いますが、決めてくれませんか。35年卒から少なくとも毎月5名は出席させます。よろしく。

佐竹 章夫 (昭和35年卒)

■当方、次女も来年結婚予定です。少し肩の荷が軽くなった様な気持ちと寂しさもあり、また、実母も同居しましたので、少し介護の勉強と実践を肌で感じる今日この頃です。

大学の先輩の死に接し、体には十分気をつけて(気をつけてもだめな時もあります)日々過ごせたらと思っています。

皆様もお体ご自愛の程、お祈りいたしております。

間仲(小坂) 淑子 (昭和48年卒)

■新聞記者をやめて大学院に入り、悪戦苦闘の末就職した都内の"名門女子大学"をこれまたやめ、2002年4月から晴れてフリーの身となりました。翻訳家としてタマゴからかえったばかりですが、おかげさまで2002年9月には『人間の終わり』(フランシス・フクヤマ著、ダイヤモンド社)、12月には『ファンタジー画集一指輪物語の世界』(ジョン・ハウ著、原書房)、2003年梅春にT.フリードマンのピューリツァー賞受賞コラム集(ウェッジ)と、幸運なスタートを切りました。早いもので年齢はもう大台に乗ってしまいましたが、キャリアはまだ小学生。悪馴れすることなく謙虚に大胆に頑張る決心です。マスコミによると(笑)、私の年次は「あきらめの悪い女性が多い」そうで……。いいことですよ!

鈴木(西塚) 淑美 (昭和60年卒)

■ニッセル先生の記事に大変感激しました。先生とは

誕生日が同じこともあり、今でもお手紙のやりとりを
させていただいています。翻訳、通訳の仕事を経て、
英国への3年間の園芸留学、そしてそこで出会った韓
国人の夫と、今年結婚しました。海外で暮らすことの
長かった20代でしたが、今ではふるさと福岡で高校
の先生をしています。ユニセフで働くという大志を抱
いて上智へ入ったことも時折思い出し、今の自分と照
らしあわせてみたりもしますが、充実した幸せな日々
に感謝しています。

皆様、Let's stay in touch!

manabeshoko@hotmail.com

真鍋 尚子 (平成5年卒)

■ドイツでの滞在も早や3年、単身赴任生活の厳しさ
から当初の意気込みに反して、生活は荒れる一方。ふ
と気が付く。来年は銀祝授与。年末、ミュンヘンソフ
ィア会の集まりに触発され、年末年始休暇時、銀座で
昭和53年有志と久し振りに飲んだ。

5月の銀祝授与式は万難を排して参加したいと思いま
す。

四半世紀を経て、同窓の男子、女子はどうされている
のやら。25年のうち、13年間も海外生活をしている
小生としては……。人生の残り3分の1をチャレンジ
ングに過ごすため、今一度原点に帰りたいと思う今日
この頃です。

廣瀬 一郎 (昭和53年卒)

■現在、国際観光振興会(平成15年10月からは「独
立行政法人国際観光振興機構」と改称予定)で、日本
の観光宣伝に従事しています。お蔭様で長女が比文4
年、次女が外英2年に在籍しています。

鈴木 誠一 (昭和44年卒)

■イメージに憧れて上智大学に編入はしたものの、不
真面目な学生で、医者(内科医)として働いている今に
なって「もっと真剣に勉強しておくんだっ！」と後
悔することしきりです。

平成13年の9月から、約3年間勤めた大分県の病院
より、ここ鍋島藩の城下町であった佐賀に移り、娘2
人もゴルフに没頭していて、医者かゴルファーか区
別し難い夫も揃って、この町に馴染んできました。
海外での老後を夢見ている夫共々、少しずつ通勤の
途中で英会話の勉強をしているこの頃です。

佐賀や福岡、長崎界隈にお住まいの皆さん、是非お
立ち寄りください。

Yumin715@po2.bunbun.ne.jp

大塚(大慈弥) 由美 (昭和60年卒)

■いつも御連絡ありがとうございます。本人の父親
でございます。今日は代筆をさせて頂き、御連絡を
させていただきます。よろしく御願い申し上げます。
実は本人は、3年前からアメリカのモンタナ大学に留
学しております。大学を卒業後、一旦は企業に就職
したのですが、どうしても30才前にもう一度留学し
たいと言って出かけております。

上智大学在学中に交換留学でミネソタ大学に行きま
したが、何かやり残したことがあるとかで、再びアメ
リカの土を踏んでおります。今年5月には帰ってくる
予定ですので、今後ともよろしく御取り計らい下さ
る様御願い申し上げます。

矢崎 健 (平成6年卒)

――御尊父より

■娘(連 敦子)が神様に召されて昨日(12月5日)4
年が経ちました。亡くなった後、上智の卒業生とし
てご縁がなくなるのをとても残念に思いまして、引
き続き何かのかたちで思い出を大切にと思い、私共
の家を連絡の場としてお願いいたします。

〒216-0003 神奈川県川崎市宮前区有馬1-6-1-501

藤原敏晶方

連(藤原) 敦子 (昭和54年卒)

――御尊父より

■落合、森本、熊野(昭和46年卒)の3人がSELDA

卒業生短信

セミナーの世話人を御引き受けして、早いもので2年が過ぎました。この間、私達をとりまく状況も、様々でセミナーの出席者数も多いとは言えないのですが、素晴らしい講師の方々の熱心な講義に支えられ、ここまでどうにかお役を務めさせて頂いています。

残る1年間の間に、この会の運営をしてくださる方達を捜して、引継ぎをしなければと思っています。

1984年11月、21名でスタートした、このセミナーをできることなら閉ざしたくありません。今でこそ「生涯教育」は当たり前ですがニッセル先生の大きな御力添えや先輩がたの努力を次代につなげて行ければと思っています。

最後にご本人自身も、たびたび講師をしてくださり又、魅力的な講師のご紹介など、このセミナーを支えてくださっているお二人の最近の著作をご紹介します。

S.47卒 谷口 由美子氏

1. 『あしながおじさん』
アリス・ジーン・ウェブスター著
岩波少年文庫
2. 『図説 子どもの本・翻訳の歩み事典』
子どもの本・翻訳の歩み研究会編 柏書房
3. 『大空(そらへ)へ——ジョージとガンの王子』
ジェイン・ラングトン著 あかね書房
4. 『少女ポリアンナ』
エレノア・ポーター著 岩波少年文庫

S.52卒 片野 順子氏

1. 『気持ち伝わる英語 eメールの書き方』
角川oneテーマ
2. 『英語で恋愛小説を読んでみる』 明日香出版社
3. 『世界の言葉でアイ・ラブ・ユー』
日本放送出版協会出版

是非、本屋さんに立ち寄って一読してみてください。

熊野 順子 (昭和46年卒)

■最近のニュースと言っても、とりたててないのですが、還暦を過ぎ、子供も育ち上がり、料理を作ったり、本を読んだり、好きなクラシック音楽を聴いたりの日々です。

今年からは、絵をもっと描きためて、将来ささやかな個展でも開けたらと思っています。

(こういう風に書くと、如何にも平穏な人生のように思えますが、人並みに今迄の道程は嵐の連続でした。)

太刀川 徹郎 (昭和40年卒)

■9ページにありました、昭和43年卒によるホームページ

<<http://www2.wind.ne.jp/johodesign/eigoka39-43/>>
の企画をされている篠崎(根子)多由美さんからのお便りです(編集部より)。

「私たちのHPが楽しく、活発なのはひとえに笠松氏のお陰です。プロとしての能力はもちろん、母校ソフィアに対する深い思いがあることはいまでもありません。それに付け加えるなら、私たちは学生時代、今までで一番出来の悪い学年だと言われて、事実、成績もあまり芳しくなかったのですが、男女を問わずクラスの仲が良かったのではないかと思います。学生運動世代のような特に強い結びつきではないのですが、卒業後もなんとなく都合のつくもの同士が集まってきました。現在のセミナーの前身である女性セミナーを始めた際にニッセル先生が「最初から大きくやるのではなく少ない人数で無理せずに長くやるのが大切だ」と言われたことが印象に残っています。あまり大上段に構えずに、会員のメールの掲載などから始めたら自然に良いHPが出来上がっていくのではないのでしょうか。」

篠崎(根子)多由美 (昭和43年卒)

SELDA セミナー

SELDAA セミナーは、毎月一回、水曜日10:30～12:00、ソフィアンズ・クラブで開催されております。

今回は、2002年度後半に行われたセミナーについて、出席された方にご報告いただきました。

これまでに開催されたセミナー

● 2002年9月25日(水)

中川 明氏 (前北海道大学法学部教授、弁護士)

『少年事件と私たち』

弁護士として、子どもの権利に関する事件に携わってこられた講師をお迎えしました。冒頭に、イギリスの「バルジャー事件」のビデオを観ました。これは、1993年に2歳の男の子が誘拐・殺害された事件につき、10歳の少年2人が逮捕され、世界的に衝撃を与えると共に、刑罰や更生のあり方をめぐる大きな論議を巻き起こした事件です。

日本でも様々な衝撃的事件が起こっています。なぜ子どもがこのようになってきたかについて、法律家の調査は、重大事件を起こした少年達は幼児の時に親から身体的・心理的虐待を受けていた子が多いことを示しています。それなのに少年達だけを罰することが妥当なのか、と講師は問いかけます。

子どもが変わった以上に、大人の子どもに対する眼差しが変わったのではないか、大人は子どもに対する寛容を失っているのではないか、との講師の指摘に、私達大人も自らを見つめ直す必要を感じさせられました。

(平成元年卒 川合(香川)順子)

● 2002年10月23日(水)

蟹瀬 誠一氏 (ジャーナリスト)

『Reading Between the Lines - News thru the TV Lens』

私たちは新聞、テレビなどのメディアを通していろいろなニュースを知り、その情報に基づいて、またいろいろな世論を形成する。テレビによる報道ほど、私たちの世界観に影響するものはない。しかし、残念なことにそれはともすれば部分的で、放送局によって選択された素材で、いわば少し色付けされた社会を写す鏡である。そして一般大衆はその電気式メディアを媒介として世界を見ている。特に、外信ニュースについては、西欧諸国のメディアと比べると、編集のやり方に工夫が必要である。例えば、視聴者の基本的な疑問を説明すること——例えば、なぜそれが起こっているのかとか、そのニュースの背景について。

つまり、日本のメディアの報道は、時々情報を歪曲している。特に外信の報道について、世界を二つの単純なカテゴリーに分けたがる傾向がある。敵か味方か、右か左か、お金持ちか貧乏か、というように。現実には、世界は文化や伝統などの点からして、もっと多様性がある。

日本のテレビによる外信報道は、もう少しバランスのとれた正確な報道をすることを心掛けるべきだ。一般大衆はどちらかという平凡なことに興味を持つが、ジャーナリズムとは世界の現実を説明する努力であり、社会正義や、倫理的な高潔さなどの道しるべとして機能するよう努めるべきである——など、以上、蟹瀬氏の日本のメディアについてのコメントでした。

(昭和53年卒 佐藤 誠一郎)



● 2002年11月27日(水)

吉田 美枝氏 (戯曲家)

『「戯曲 Pentecost」について』

SELDAAセミナーでは、前にも何度か戯曲翻訳の面白さを伝えてくださった吉田さんですが、今回の作品は特に内容が難しい上に登場人物も多国籍なので、大変苦勞なされたそうです。英米の劇特有の長いセリフをいかにうまくカットして観客にわかりやすくし、しかも原作の雰囲気は損なわないようにと工夫するのが腕のみせどころです。時には演出家を助けてセリフや演技の指導もされるとの事で、稽古中の裏話も聞かせていただきました。作品が完成していざ上演が始まるという前日には、かわいい我が子を手放すような一抹の寂しさを感じるというお話に、台本翻訳に対する吉田さんの情熱を感じとりました。

(昭和43年卒 座間(不破)由美子)

● 2002年 12月11日(水)

谷口 由美子氏 (児童文学翻訳家、昭和47年英語学科卒)

『「あしながおじさん」を訳して』

少女の頃慣れ親しんだ「あしながおじさん」の翻訳裏話を期待して集まった聴講生の中には、ニッセル神父もいらした。内容は、最初の邦題が「蚊とんぼスミス」であったと言う、上述の作品のほか、谷口氏の最近作三冊に及んだが、時代の流れに沿った訳語への工夫、原作者と面談による詰めなど興味深かった。本離れが著しい今、私たちが夢を貰ったように、良心的な児童文学が読み継がれていくことを切に願う。

(昭和46年卒 松田(渡辺)順子)

● 2003年1月22日(水)

岡田 仁孝氏 (上智大学比較文化学部教授、上智大学比較文化研究所長)

『ケンブリッジ大とオックスフォード大でのサバティカル』

Mr. Okada talked about his experience of spending a year as a fellow at the Universities of Cambridge and Oxford.

First, he showed pictures of the beautiful scenery in England, where wide expanses of greenery and long canals without dikes are preserved. Then, he pointed out problems he faced living in England; unreliable public transportation and postal systems, and the free but poor public medical system.

He explained the reason the U.K. remains the fourth largest country in terms of GDP is the creativity generated by the well-educated elites in the form of venture firms.

He concluded that the English stress self-responsibility and individuality, but, with the decline of their economy, some flaws in the social system appeared. This may have implications for the future course of Japan.

(平成元年卒 大石 りか)

● 2003年2月26日(水)

吉田 研作氏 (上智大学外国語学部英語学科教授、昭和47年英語学科卒)

『「英語が使える日本人」の育成—これからの日本の英語教育を考える』

先生の講演は何と全て英語でした。これほど必死に英語を聞いたことも久しぶりでしたが、ちゃんと内容が頭に入った自分に充実感を持たたと同時に、これからの日本の英語教育のあるべき姿を先生御自身が体現されたのでは、

と感じました。「これからある英語教材のテープを聴いてもらいます。その後皆さんに質問します」とおっしゃり、人を指すときのジェスチャーを様々な国の人に尋ねる内容を必死に聴いた後、“Whose English do you think is the best?”と尋ねられてみな哑然。英語でコミュニケーションを取ろうとすると、あの発音がおかしいか、文法が間違えているとかチェックしながら聴くのではなく、「何を言いたいのか」理解しようとするのが自然で、逆に自分が発信するときも同じ—そこに英語を学ぶ動機付けを持ってこようという考えに同感しました。

(昭和58年卒 嶋本(小南)美子)

●2003年3月12日(水)

和泉 伸一氏 (上智大学外国語学部英語学科講師)

『Second/Foreign Language Learning and Education: Insights from Second Language Acquisition Research』

今回の演題は、Second/Foreign Language Learning and Education: Insights from Second Language Acquisition Research ということで、英語学科を巣立って25年経っても未だに発展途上の(あるいは、日本経済と同じように衰退の一途をたどっている)我が英語力のbrush upのためにもと、必死の思いで和泉先生のspeedyな英語についてゆきました。SLAにとって大切なことは、文法などのformとlisteningなどの学習をいかにうまくconnectさせるかにつきまるといことがよくわかりました。

(昭和53年卒 石井(増谷)真由美)

SELDA セミナー 今後の予定

●2003年4月23日(水)

Fr. John Nissel, S.J.

(上智大学名誉教授、元英語学科長)

『Question Box: Living in Japan since 1950 (come with questions!)』

*講義後、茶話をいたします(14:00頃終了予定)。

●2003年5月28日(水)

高 二三 (Ko | Sam) 氏 (新幹社社長)

日本生まれ、日本育ちの在日韓国人二世が語る——『在日とは』

●2003年6月25日(水)

小笠原(古山)祐子氏

(日本大学経済学部助教授、昭和58年英語学科卒)

『カップル・キャリア——その可能性と課題』

●2003年7月9日(水)

片野(金山)順子氏

(ジャーナリスト、昭和52年英語学科卒)

『世界の言葉でアイ・ラブ・ユー』

●2003年9月24日(水)

松本 基子氏 (皇學館大学社会福祉学部教授)

『誰がになう私の介護』

場所：ソフィアーズ・クラブ

時間：10:30～12:00

会費：3,000円/年(英語学科卒業生)

5,000円/年(英語学科以外)

500円/1回毎

*事前の予約は不要です。当日直接会場にお越しください。

世話人：熊野 順子(昭和46年卒)

森本 佳子(昭和46年卒)

落合 彰子(会計)(昭和46年卒)

《ニッセル先生を囲む会のお知らせ》

昨年からS.J.ハウスに戻っていらしたFr.Nissel。懐かしい先生と共に母校でのパーティーに参加して楽しいひとときを過ごしませんか。詳細は下記の通り。皆さんお誘い合わせの上お越しください。

●日 時：2003年6月6日(金) 午後7時～

●場 所：上智会館5階 第6会議室

●形 式：立食パーティー

●会 費：2,000円(当日お支払いいただきます)

●参加希望の方は同封の葉書でお知らせください。

2003年5月9日(金) 必着

※葉書には、「囲む会出席希望」とお書きください。

※会場の都合上、先着順に200名様とさせていただきます。

なお、必要に応じて後日事務局よりご連絡しますので、住所、電子メール

アドレス、電話番号、FAX番号等、連絡先をお書き添えください。

■異動通知にご協力ください

ご住所、勤務先などに変更があった方、名簿の誤りを訂正される方、お名前の正しい読み方を知らせてくださる方は、英語学科同窓会事務局またはソフィア会事務局までお知らせください。(英語学科同窓会事務局にお知らせいただいた場合、ソフィア会事務局にも通知しております。)

住所不明の方が多数いらっしゃいます。消息をご存知の方、情報をお寄せください。お友達で会報が届いていないという方がいらっしゃいましたら、是非事務局までご一報ください。また、最近では市町村合併などにより、かなり住所が変わっておりますので、是非最新の住所、電話番号等をお知らせください。

2004年3月に同窓会名簿を発行予定です。一人でも多くの方の最新の住所等を掲載したいと思いますので、皆様のご協力をお願いいたします。

■SELDAAより、募集とお知らせ

◆SELDAAでは、皆様よりこの会報に載せる記事を募集しています。近況や最近感じたことなど、何でも結構です。書式は自由ですので、会報に同封の葉書、あるいは、便箋等にご記入の上、同窓会事務局宛にお送りください(写真も大歓迎)。

◆この同窓会の常任委員として手伝ってくださる方を募集しております。ボランティアで私達と一緒に会を盛り上げてくださる方、ご連絡をお待ちしています。

上記に関するご応募・お問い合わせは、お気軽にどうぞ。

連絡先：〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町7-1 上智大学英語学科事務室気付 上智大学英語学科同窓会事務局

FAX.03-3238-3910 E-mail:seldaa@mve.biglobe.ne.jp

(Faxは、英語学科同窓会宛を明記してください。)

■会費納入のお知らせ

本会の諸活動は、卒業生の皆様からの会費の納入によって賄われています。同窓会活動のより一層の充実と活性化を図るために、ぜひ会費をお支払い下さいますようお願い申し上げます。

会費の支払方法には、毎年会費を支払う「一般会員」と、一括払いの「終身会員」の2通りがあります。初めて会費をお支払いになる際には入金会も合わせてお支払い願います。金額は下記の通りです。同封の振替用紙にて最寄りの郵便局または銀行よりお支払いください。その際、ソフィア会会員番号を必ずご記入ください。

(なお、振込用紙は、発送の都合上すべての方に送っておりますので、ご了承ください。)

入会金：1,000円

一般会員：年会費2,000円(できれば3年分まとめて)

終身会員：一括払い20,000円

■あなたの会費納入状況

封筒の宛名ラベルの右上をご覧ください。

◆「S」のスタンプが押してあるのは、「終身会員」であることを示しています。

◆「未」のスタンプが押してあるのは、今年度の会費が未納になっていることを示します。

6,000人を超える同窓会会員の会費納入状況のチェックには多大な手間と時間がかかります。チェックの時期と納入の時期が重なったなどのために行き違いがあつた場合は何卒ご容赦ください。

SELDAA 常任委員 (2003年4月現在)

■名誉会長／Michael Milward (英語学科長)

■会 長／石川 雅 弥 (昭和40年卒)

■副会長・事務局長／池 沢 成 実 (昭和48年卒)

■副 会 長／大日方聖信 (昭和62年卒)

■会 計／内藤 恭子 (昭和55年卒)

寺北 ゆかり (昭和61年卒)

■会 報／佐藤 誠一郎 (昭和53年卒)

■SELDAA セミナー／安 西 徳 子 (昭和49年卒)

■常 任 委 員／蔵 田 實 (昭和48年卒)

増 田 光 (昭和59年卒)

東 郷 公 徳 (昭和62年卒)

■監 査／井 坂 由 美 子 (昭和47年卒)

岩 村 玲 子 (昭和49年卒)